

訪問診療での
優しい目線

染川医院（久が原5丁目）
内科医 染川実香先生

「昔前は今日のように医療の専門分化もなく「赤ちゃんからお年寄りまで」を開業医が診ていました。

そんな時代に、両親が大阪で開業しており、夜の診療前には両親と病院職員全員が一堂に会して急いで夕食を取っていた光景を見て育った一人っ子が、成長して職業に医師を選んだのはごく自然のなりゆきかもしれません。

「医師の家でもないのに医師を志し、山奥から大阪に出てきた大正生まれの母が私のモデルでした」。

ある女性の医師との出会い

医師の資格を取り関西で勤務医に。結婚を契機に関東に移り、内科と心療内科の専門医として国立精神神経センター・国府台病院（※現在は国立国際医療研究センター・国府台病院）などで勤務する染川先生に大きな転機が訪れたのは後継者を

探していた一人の開業医との出会いです。

安達聡路先生の35年に及ぶ医師としての生き方や在宅診療に取り組む姿勢は、母と同じように「女性医師の先駆者」といえました。その姿勢を見てきた染川先生が久が原での開業を決意したのは4年半前。以来、午前を外来、午後はほとんど毎日、何かあったらすぐ飛んでいける範囲内で約30人前後の患者さんを在宅で診ています。

「通院が難しい重度の障害や病気や心の問題がある方が多いので気が抜けない部分がありますが、うれしいのは訪問診療の患者さんがリハビリなどで元気になり、通院できるようになったときや、その方のご家族が来てくださるとき。残念ながらそういう方の数は少ないけれども、それはうれしいですね」と患者さんと心身ともに疲れている介護者へも染川先生の目線が届く。



染川医院（久が原5丁目）
内科医
染川実香先生

生活者の視点を獲得

「晩婚で高齢出産だった」と笑う子育ての間、週3日の非常勤をした時期もあり、「プライベートと仕事の両立は一時的にハンディと感ずることもあった」が、その後、自ら母親を在宅介護で看取った6年余りの経験を経て、医者になった当初から目指していた「場所や医療が変わっても患者さん目線と介護者目線を心がける診療」へと自分の診療スタイルが変わったと話す染川先生。

「男性と同等に病院で働き、忙しければそれだけ、『生活者の視点』は獲得しづらいものではあるが、いやおうなしに介護にかかわると、そういう目線がないとできない。それが獲得できたのは仕事とプライベートが自分の中で合体・統合したから」と、今は訪問看護ステーションと連携を取りながら進める地域医療に軸足を置く染川先生。

「楽しみ」は読書と中学生の一人娘を誘っての山歩きとか。「女性の生き方、働き方の選択肢が広がった今、娘は未来を自由に選択して欲しい」と異業種の夫と話している様子です。

パステル
おすすめ本

女性は自分の身体の
メンテナンスを
後回しにしがち。
身体のサインを
見逃さないように！

産婦人科医の日記「Dr.半熟卵のつぶやき」

須藤なほみ 虎ノ門病院産婦人科医師 ぜんにち出版

本書は「Dr半熟たまごのつぶやき」というブログを開設し、ブログランキング「医学」部門で連続第一位を獲得、情報をもっと多くの方に伝えたいとの思いから2006年書籍化したものです。女性なら知っておきたい情報、女性外来婦人科の選び方、賢い病院のかかり方、検診のススメ等いまさら聞けないと思うことも優しく解き明かしてくれています。

ぜんにち出版 1,365円

